

付属資料－２ 普天間飛行場跡地利用計画策定審議委員会の記録

1) 日時、場所

- と き : 平成 25 年 3 月 28 日 (木)、15:00～17:00
- と ころ : カルチャーリゾート・フェストーネ (多目的ホール)

2) 出席者 (敬称略)

○ 委員

平啓介	／琉球大学顧問
黒川光	／東京工業大学名誉教授
上間清	／琉球大学名誉教授
岸井隆幸	／日本大学理工学部教授
堤純一郎	／琉球大学工学部教授
津嘉山正光	／琉球大学名誉教授
宮城邦治	／沖縄国際大学総合文化学部教授
安里繁信 (代理: 比嘉徹)	／(財) 沖縄観光コンベンションビューロー会長
照屋義美 (代理: 川満光行)	／沖縄県商工会連合会会長
國場幸一 (代理: 宮城俊彦)	／沖縄県商工会議所連合会会長
宮城信雄	／沖縄県医師会会長
仲村信正	／日本労働組合総連合会・沖縄県連合会会長
比嘉成和	／沖縄県社会福祉協議会常務理事
福里清孝	／宜野湾市商工会会長
平良エミ子	／宜野湾市婦人連合会会長 (婦人)
又吉信一	／宜野湾市軍用地等地主会会長

○ オブザーバー

藤本一郎	／内閣府大臣官房審議官
藤田雅史 (代理: 杉浦哲夫)	／内閣府政策統括官 (沖縄政策担当) 付跡地利用企画官

○ 事務局

謝花喜一郎、下地正之、塩川浩志、安里栄作、金城新吾
松川正則、比嘉秀夫、田場盛茂、呉屋義勝、仲村等、渡嘉敷真

3) 配布資料

会次第、配席表、委員名簿、審議委員会設置要綱

資料 1 沖縄県と宜野湾市のこれまでの取組の経緯

資料 2 普天間飛行場跡地利用計画の策定に向けた「全体計画の中間取りまとめ」(県市案)

参考資料 1 普天間飛行場の跡地利用計画策定に向けた「全体計画の中間取りまとめ」(委員会案) (パンフレット)

参考資料 2 中南部都市圏駐留軍用地跡地利用広域構想 (パンフレット)

参考資料 3 普天間飛行場跡地利用基本方針 (パンフレット)

参考資料 4 跡地利用計画の策定に向けた行動計画 (パンフレット)

4) 質疑内容（発言順、敬称略）

岸井委員：全体計画の中間取りまとめ検討委員会での議論を紹介する。

委員会案は、沖縄県、宜野湾市がこれまで調査してきたことを横串にまとめたものである。検討委員会では「環境」という切り口を大切にすべきという意見が多くでた。その背景には昨年、緑地の調査が進んだので、それをベースにして交通、土地利用を考え直し、今回の絵を作成した。

現在も得られている情報は限定的であり、住宅需要もこれまでのように期待できなく、機能誘致を真剣に考えるべきというご意見があった。

今後はアクションプランづくりと同時に、合意形成を一体的に取り組む必要がある。3月10日には県民フォーラムで委員会案を紹介し、県民・市民と中間的成果について議論を行った。

津嘉山委員：検討委員会では様々な意見があった。

中南部都市圏は県民の8割が居住している拠点であるため、周辺との土地のかかわり、特に交通の部分が重要と考える。

現時点では、フィジカルな調査が未だ不十分であり、今後はタイムスケジュールを想定した上で、アクションプランをしっかりと作成してほしい。実施に向け細かいことを積み上げていくことが必要と考える。

堤委員：検討委員会では、「普天間」という名称をこのまま残すか、本来の地名に直した方がよいという意見もあった。また、昔の面影を残す開発か、周辺との境界線を消し去る土地利用にするかなどの方向性をどうするか。

又吉委員：地名については賛否両論ある。普天間飛行場やキャンプ瑞慶覧は米軍がつくった名称であり、将来は公募により名称を変更する必要があると考えている。

上間委員：普天間飛行場の480haは大きな面積であり、開発インパクトを考えると中南部都市圏で重要な位置づけになる。県市案については以下の通り考える。

①委員の構成は、沖縄市など中南部都市圏における市町村の代表の方々も委員に含める必要がある。

②「公共交通軸は、…広域的な集客拠点や居住ゾーンとの近接性に配慮して配置」（22頁）と表現されており、商業拠点のイメージが強いがより広い観点で表現できると良い。

沖縄県：①参考資料2（広域構想）は、各市町村が一体となって作成した。これをベースに各市町村が跡地利用計画を作成することになっている。普天間飛行場の跡地利用計画についても、本来、宜野湾市の単独で良いが、広大な面積であるため沖縄県と共同で検討を行っている。

②鉄軌道については、内閣府において平成22年からルート等の検討が行われている。このルートは基地跡地を通す方向になっているので、今回の絵のようになっている。

福里委員：道路を整備すると、通過されるまちになることが多い。宜野湾市にとどまってもらうためには宿泊施設が必要であり、まちの魅力を高めるには道路より鉄軌道の方が良いだろう。路面電車でゆっくり走行すると人が多くとどまるのではないかな。糸満から山原まで一本で通してほしい。

宮城委員：検討委員会では、基本的なベースとして地形（石灰岩、傾斜等）を捉えた上で、最

初に「環境」をキーワードとしている。湧水のみなもとは、基地からの地下水であり、これを残す計画にするにはより詳細な現地調査が必要になる。

また、歴史的資産を活かし、できるだけ旧集落を再生することを重視しているが、現地調査が不足している状況である。

今後の現地調査の結果により、配置方針図も変わるものと理解していただきたい。

津嘉山委員：機能導入のベースは、水、電気、交通、情報基盤である。このあたりの記述が弱いので、これも含めて情報発信してほしい。

上間委員：「全体計画の中間取りまとめは、公共交通軸等における今後の枠組みを示したものと理解している。鉄軌道は「鉄道」と「軌道」であり、鉄軌道≠鉄道でないことに留意してほしい。

宮城委員：振興拠点ゾーンに「医療」が位置づけられたことはあり難い。これを具体的にそうイメージするか。琉球大学医学部の建物は現在築 30 年であり、近い将来は建て替えが必要になる。現在琉球大学は手狭であり高度医療にも対応できていない。この建て替えを視野に入れて計画を進めてほしい。

仲村委員：以前、審議委員会で普天間のまちづくりは「環境」をキーワードにすべきとお話しさせていただいた。これが今回キーワードになったことは嬉しく思う。これからは低炭素社会で、環境にやさしいまちづくりに向けて、路面電車を導入することも重要と思う。

また、「普天間」という名称は、世界的に知られている。跡地利用で世界から人を呼び込むまちづくり、視察にくるまちづくりをしてほしい。これにより地域経済に加え、県経済にも貢献するだろう。個人的には「普天間」という名称にこだわりたいと考える。

黒川副会長：「環境」でまとめるのは良いと思うが、現在は緑系の環境が中心になっている。エネルギーや生物多様性などをもう少し検討した方が良いだろう。世界的にも技術革新が進むことが予想されるため、それらを取り込んだ方が良いだろう。

堤委員：現在の最先端の環境に近い将来もそのまま存在するかは心配な面があるので、現時点では「ほかした環境」で良いのではないかと考えている。
一方、水環境、地下水循環を守るとして基本的な方針は絶対捨てられないことと考える。

平良委員：宜野湾市は県の中心でおへその部分なので、交通に関心がある。婦人会でも路面電車の話ででることが多い。また、環境では歴史性を重視したい。
緑豊かで人が集まるまちづくりに向けて総合的に取り組んでほしい。

照屋委員（代理：川満氏）：商業の立場から申し上げると、道路交通体系ができると、通過点になることが多い。賑わいの場をきちんとつことに気を付ける必要がある。
沖縄は賑わいづくりでも限られたバイの奪い合いをしている。県外からの客を呼び込んで、域外収支を高めてほしい。

平会長：本日の審議委員会で「全体計画の中間取りまとめ」（県市案）を承認することとした。今後、議事録をまとめるなかでの表現等の修正については、会長と副会長に一任とさせてほしい。

以上